

「好色一代女」と「好色一代男」との相関関係 (一)

——伝西鶴本の身許調べ——

島 田 勇 雄

(一) はじめに

「好色一代女」は西鶴の作品とされている」と言くと、誰しもが「今更なんでそんなことを言うのか」といった顔をすることで、事情を知らぬ者ほど平然としていて、「文学史の時間にそうならつた」とか「誰その書物にそう書いてある」とかと答えるであろうが、専門家ほど困つた顔をするであろう。事実「好色一代女」のどこを探がしても、それが西鶴の著作であることを示す外部徴証は全くないのである。水谷不倒氏の「西鶴本」には、本書の書誌学的側面に関して、版行・挿絵・製本・本文・行数についての記述のあとで、「本書には序文及び作者の名あ

るものを見ず。しかし「一代男」と共に西鶴の傑作と称せらるるもの、作者も亦得意の作と見えて、製本も立派に、殊に貼付表紙の制を用いてゐる。」とされる。水谷氏はよく同書で、「序文及び作者の名なけれども、西鶴作として疑ひなきもの。」(「好色五人女」といったふうの解説をされる。「好色一代女」もその類で、今更、それが西鶴作であるかないかなどは言うまでもないことだとされるわけである。水谷氏には独自の西鶴作品観があつて、それに基づいてそう断定されるのであろう。たしかに本書の著述された大正時代においては、殊に本書の如き啓蒙的著述では、そのような論法でよかつたであろうが、斯学が隆盛を極めてくる現在においても、西鶴学の専門家一般の方法としてその種の論法が遵守されているかに思われるのは望ましいこ

とは思われない。西鶴本の文献学的研究成果としては、さきに「西鶴」(天理図書館編)の卓抜した成果があり、また「近世文芸資料類從 西鶴編」(勉誠社)の精緻な成果などが続出しつつある。それらの諸成果に基づいて、改めて個々の作品についての基礎的吟味を開始すべき時期に来ているのではないかと考えてみるのである。

いわゆる西鶴本の中には、西鶴の作であることの真否の点で学界の全面的賛成を得ているとは言いきれない作品が若干あり、それを存疑本または質疑本とよぶことがある。^(注1)しかし「好色五人女」や「好色一代女」のように学界全体は西鶴作であることを信じて疑わず、それについての文学論や作品論を行なっているにもかかわらず、その外部徴証にはそれが西鶴作であることを論証すべきものは全くなく、西鶴作であることの論証は作品の内部徴証を中心に実施しなければならぬような作品が多数ある。そのような作品を、私は質疑本という名称にならうって「伝西鶴本」と呼ぶことにしている。西鶴の作品と伝承されてはいるが、そのことの学的論証の未完成な作品と言うほどの意味を籠めている。それらがまぎれもなく西鶴の作品であることの論証を十分に行なうのが学界人の良心であると考ええる。それが西鶴学の最も根幹的な学的態度というものであらうと私は

考えているのである。その作業の完了するまでは、私の言う伝西鶴本は要するに日かげの身であると考えたい。たとえば、歴史学においては、かつて津田左右吉博士のなされた時より更に広い視座の中で、つまり単に文献のみに依拠するのではなく、考古学的成果をも含めた観点から「古事記」「日本書紀」の文献学的研究がなされようとしている。^(注2)国文学・国語学資料についても同じように従来よりもっと広い視座の中で、厳しい文献学的研究等による土台堅めをなすべき時期に来ていると私は考えるのである。

森鏡三氏は、「西鶴と西鶴本」の中で「一代女」は西鶴が、「団水に代って書かしめ、西鷺にも多少手伝はせ、己はたゞ僅かに部分的に補筆したのだった」と述べておられる。森鏡三氏の西鶴本に関する提言はその根本問題に関するもので、きわめて重要である。ただ森氏の「一代女」についての論証方法はひどく乱暴で、十分に説得的であるとは言いかねるが、その真の作者は西鶴以外の者であるという設問は無視してはならないようなものである。

どのような方法・基準によって、一つの作品を西鶴の著作と認定するのかということとは容易なことではない。出来るだけ多くの論拠を摘出し、それらの綜括として結論を導くことが好

ましいことは言うまでもないであろう。いわゆる質疑本の中に「近代艶隠者」があり、これについて野間光辰氏の卓論がある。^(注3)その論の一部として老荘思想の性格について論ぜられたところがある。つまり、「従来、論者はこの本書における老荘的なものに着目して、直ちにこれを西鶴の談林俳諧師としての老荘的教養に結びつけ、以て本書の西鶴作なることを立証し得るといふ風に考へて来た。」とされるような論がまず行なわれていた。それに対して野間氏は、「恰も本書全体の基調を構成するものの如き相貌を呈してゐた老荘思想は、一度既にその以前において禪的思想を濾過し來つたものであり、禪的思想を母胎としてそこに胚胎派生し來つたものなのである。」と反論される。そしてそのような思想の持ち主としての作家西鶴軒橋泉に言及される。その結論は緻密な分析に裏打されたものであることは言うまでもない。けれども、老荘思想や禪的思想などという類のものは、観点の如何によつて、動揺しやういもののように私には思われる。私はかつてこの問題について調査したとき、きわめて個性的でありかつ感覺的である、色彩用語と擬声語・擬態語とを基準に調査したことがある。現代の作家の中にもこれらを全く使用しない人がいるし、非常に独自の使用法を持つ人がいる。それは明らかに作家の個性に関することであり、作風その

他に密接することである。それらに関するかぎり、「近代艶隠者」は西鶴真作と考えられる諸作品の傾向と大きく相違する傾向を持っている。「艶隠者」の色彩語は漢語を基調とするものであり、ほとんど、むしろ全く擬声語・擬態語を持たない。この作者は感性的側面に劣っており、思索的側面に長じておると思われるのである。思想的なものよりこのような個性的要素が強く客観的基準としやういものを比較の基準とする方が好ましいであろうと私は考えているのである。

森鉄三氏はその論の論証に語彙や表記法を使用される。西鶴的語彙・団水の語彙などを設定し、それに基づいて、これは西鶴の真作、これは団水の代作などと結論される。ユニークな方法と言へる。しかし、特異な単語や「三五の十八」などという類の慣用句は、それが独特のものであればあるほど、偽作者に模倣されやうい。げんに、「丹波太郎物語」において、江島其碩は西鶴の用語・筆蹟・字体までも模倣している。^(注4)そのように、視座の差違によつて解釈の差違の生じやうい事項とか模倣のしやういような事項などは、論拠とはしやうい方が好ましいと考えるのである。

私はかつて西鶴本の仮名づかいについてややしばらく調査し報告した。それは版下書きと仮名づかいとの相関々係についての

調査報告に始まり、のち仮名づかひの実態に基づいて西鶴の自筆の鑑定に及んだものであったが、^(注5)更に実は仮名づかひの実態を契機にして、森銃三氏の提起されたような、代作者等に関するきつかけなどを掘むといったようなことも考えていたわけである。そのことは西鶴本に関するいかなる調査段階にも忘れられたことはない。ところで、森銃三氏は「所謂西鶴作浮世草子の半数は他作なり」(「西鶴研究」復刊第三集)の中で、「俗つれづれ」が西鶴作でない根拠の一つにかなづかひを挙げられた。即ち、「俗つれづれ」のかなづかひは「一代男」のかなづかひと相違する。「一代男」は西鶴のかなづかひであり、「俗つれづれ」のかなづかひがそれと相違することは「俗つれづれ」の作者が西鶴とは別の人である証拠であるという論法である。当時は仮名づかひの規範は確立しておらず、多くの人が自分好みの基準によって表記していた時代なので、森銃三氏の論拠は至極客観性の強いもののように見えるであろうが、私の調査では実はそれは誤っているのである。森銃三氏は整版印刷には整版用の原稿を書く版下書きが存在することはもちろん承知しておられたに違いない。ただその版下書きは、現在の活字印刷における組み版者の如く、原稿のとおりに一字一句も間違えぬように書き挙げると考えておられたのであろう。それで、「一代男」は西鶴

がその原稿を書き、版下書きの西吟は師の原稿どおりに版下を書いたはずなので、「一代男」の仮名づかひは西鶴の仮名づかひのままであるはずだと判定されたわけである。森銃三氏の外にも、西吟は師の原稿を一字一句もあやまらず敬虔な気持を籠めて書きあげたというような論をする人がある。西吟は西鶴に対してそのような姿勢を持っていたのであると評価するわけである。ところが、私の調査ではその評価は全く誤っていることが判明した。森銃三氏の仮名づかひに関する判定は全く本質的に間違っている。西鶴本には、版下書きは西鶴自身をも含めて多数いる。西鶴本全体としては、その仮名づかひは実に多種多様である。しかし、同一の版下書きが複数の作品の版下を書いている場合、その作品群内ではほぼある種の傾向の仮名づかひで統一されている。もちろん、西鶴自筆版下の作品群にはそれぞれの仮名づかひが行なわれている。つまり、それぞれの版下書きはそれぞれ独自の仮名づかひの基準を確立しており、平素の表記生活ではその基準に基づいて表記活動を行なっていたわけであり、彼が西鶴の作品の版下の作成を依頼された場合、彼は西鶴の原稿における表記に捕われずに、自己流の基準に基づいて表記したし、そのことは慣行として許されていたと考えられる。そのことは、たとえば「俳諧」を「俳諧」と表記することを西

鶴は嫌っていたので、西鶴がその原稿に「誹諧」と表記するはずはないのに、西鶴以外の版下書きの書いた作品には「誹諧」という表記の見られることから裏書される。したがって、「一代男」の仮名づかいは西鶴のそれではなくて、その版下を書いた西吟の仮名づかいなのである。同時に仮名づかいに關するかざり森銃三氏の論拠は誤っているわけである。^(注七)

右の版下書きと仮名づかひとの相関關係はそれのみに限らず、ある語を漢字書きにするか仮名書きにするか、漢字に振り仮名を附けるか否か、句読点を多く附けるか少なくするか、等々の表記法一般にまで妥当するようである。更にそのことは西鶴本に限らず、当時一般に慣行されたことと思われし、のちのちに馬琴のように、挿絵の構図まで指定するような作家が現われたが、それはおそらく特例で、多くの作家ではそのようなことはなかつたのではなからうかと考えている。

それはそれとして、森銃三氏の設問に対して、むしろそれの有ると無いにかかわらず、少なくとも西鶴作と証するに足る外部徴証に乏しい作品については、それぞれそれが西鶴作であると考えられる論拠を中心に作品の細部的再検討を実施する必要があるのではあるまいか。それはむしろ西鶴本を学的対象とする者の義務と言つてよい。そのようなことは一見おろかしい

作業のようであるが、新しい観点からの西鶴研究はそのようなことから再出發せねばならぬと私は信じているのである。私自身を省みて言えば、「一代男」についての編集説はもともとそのような再検討の中から發生したものである。それは、どのような事項を拠点としてその作業を実施すべきかというフタムカシ以上にわたる模索と試行錯誤の中から成立したものである。「一代男」については、私は私なりの方法で一つの到着点にほとんど到着していると思つてゐる。

(二) 「一代男」の解釈の二三

「一代男」の文章の分析としてよく利用されるのは中村幸彦氏の業績である。それは「好色一代男」の文体^(一)「近世作家研究」所収^(二)で、本来国語学会での講演に基づいて文字化されたものなので、そこで解説されることは極めて概略的なことに終つてい、それは中村氏にとつては不本意なことであるに違いない。それでは西鶴の文体を、野口武彦氏の分類に従えば、^(三)和歌^(注七)||物語文脈・^(四)和漢混淆文脈・^(五)謡曲||語り物文脈・^(六)俳諧文脈・^(七)記事文脈・^(八)書簡文脈・^(九)評判記文脈・^(十)説話談話文脈・^(十一)会話文脈の九種とされる。その会話文脈も簡單な解説に

終っているし、野口氏も「説明不要」と注記されるが、少し精しく調べれば容易に理解できるが、そんなに簡単なものではない。非常に多くの類型に分かれるし、その微妙な使用方法の中にこそ西鶴の個性的性格が見られると思つてゐるし、私はそれこそ西鶴の文体解明のための重要な基準と考えてゐるのである。この会話文については、かつて谷川郁子・野口智子の両君が非常にすぐれた調査をし、私はまたその一部について問答的説明文の名で書いたことがある。^(注8)「二代男」の会話文には、そのように説明文の一種と考えられるものほかに叙事文の一種と考えられるものがあるし、別次元に属する対話文、独白文など各種のものがあり、それらが「二代男」の中で微妙な使用法をさせ、それぞれ独自の効果を擧げている。一体、我われが日常接触する人々の中には、非常に論理的に理念的に表現することを好む人があるし、また、ある情景を感性的に、具体的に、視覚的に、臨場感あふれるように話すことを好む人がある。西鶴の会話文は後者の一種の技法として使用されてゐると思われ。それは色彩語や、擬声語・擬態語などともに西鶴の重要な個人的表現をなすものと思われ、その変遷は西鶴の文体の変遷を考へる場合見落してはならぬことであると思つてゐるのである。

これに類することは、疑問表現その他にも多出する。たとえ

ば、西鶴本一般における疑問表現には、数多くの類型が認められる。それぞれ微妙な表現上の差違を持つてゐる。ところが、西鶴本の全訳などをする方がたはそのようなことには無関心に自己裁量で適当な口語訳を施してゐられるようである。そのため同じ類型に属する文を全く違つたふうに口語訳することも当然生じてゐる。いわゆる文士・作家の全訳を歓迎する風潮が一般に見られるが、そのような点からは好ましいことではないと思はれてゐるわけである。

中村氏の和歌・物語文脈とか和漢混淆文脈などは野口武彦氏の分析されたような小さい単位ではないのであらう。野口氏は一文中の一句に和歌文脈・謡曲文脈などの名称を充たされたが、中村氏は少なくとも文法上の一文全体、通常はその数文よりなる連文に対して充たされたものと思われ。その解釈が正しいのであれば、そのようなものを私は文体とは呼ばずに修辭法と呼ぶことにしている。西鶴の文体と、西鶴もその他の作家も使用した修辭法とを区別しておきたいからである。

私の分析は文単位・連文単位の分析よりも遙かに小さい単位の分析から始まつた。それは待遇用語とか時制用語とかの語彙や語法などのいわば原子論単位の分析に始まり、のちには各章を独立する文章と見る文章単位の分析や、それらの数章による

文章群単位の分析にまで及び、その結果私なりに全「一代男」の文章の解明や「一代男」の成立経緯の把握にまで及んだ。時制用語の分析総合から無時制文よりなる遊里品定め文なる原転合書が存在に想到し、各章単位の分析から一代男型文章や一代女型文章に想到し、文章群単位の分析から「一代男」における編集という作業を確認し、更に「一代男」をほとんど全ての西鶴学者が世之介を主人公とする長編小説であると解釈するのに対し、その解釈は誤っており、真の主人公は世之介の出現を契機として登場する女性たちであり、西鶴は主として庶民の女性たちをその好色生活を契機として描写することを意図したのであり、そのように解釈することによって初めて西鶴の好色物全般を統一的に把握できるという論を公表した。なお数章単位についての編纂作業についての分析結果は近く報告するつもりである。それらの私が行なった報告を総合すれば、私なりの「一代男」の成立経緯についての推論は完了することになる。

私自身の長期にわたるそのような諸分析を省みるに、分析目的に応じて分析項目・分析方法等は当然相違することになる。したがって「一代女」と西鶴作との関係を明確化しようという場合は、それなりの分析項目を考えねばならぬし、それも比較対象との相関関係をも含みとしなければならぬことは言うまで

もない。「一代女」との比較対象は西鶴作たることがその跋文などによって明らかにされている。「一代男」とすることが最も自然であろうし、両者の比較ということ念頭において分析結果を検討するのが最も好ましいことは言うまでもないし、その比較も小単位から大単位までの各種を中心に出来るだけ多くの事項にわたって試みるのが好ましいこともまた言うまでもないであろう。

ただその基点としての「一代男」の編者について、私は目下の段階では特定できないでいる。全ての西鶴学者はそれを西鶴作と考えている。私の考えでは、「一代男」のもとになった転合書は西鶴が書いたには違いないが、それらに基づいて現「一代男」に編集したのは西鶴一人であったとは単純に言いきれない点があるからである。谷脇理史氏が拙論に対する批判として提出されたことに、六ノ四「寢覚の葉好」では僅か千二百字に過ぎない章が私の方式では六種ほどの別個の転合書からの寄せ集めということになる。それほどものなら速筆の西鶴はさらりと書き下ろしたのではなからうかと言われる。もっともな論である。私は逆に、そのようなものが多ければ、一層「一代男」の編者が西鶴一人でないことを意味するではないかと言うのである。私は、今は、「一代男」の編者を特定していない。それは「一

「一代男」の十全な分析結果次第である。それは最も考えやすいように西鶴一人であるかも知れない。また、「団水の「こゝろ葉」に西鶴が平素「美食を貯えて人に喰せて楽しむ」とあるが、その会食仲間が座興のままに参加したこともあるかも知れない。「一代男」の出版費を供出した荒砥屋可心などもその一人であったかも知れない。それに、戯文を書いた西吟もその一人であったかも知れない。「二代男」の首章に多くの者が加筆したとあるが、そのようなことも考えておかねばならぬ、と考える。多くの西鶴学者はこの問題を単純に速断しすぎている。「一代男」は本質的に俳諧師であった西鶴が、余技として転合に書いた文章の編集からできたものであって、この頃西鶴は毛頭散文作家になろうなどと考えて、この作品を書いたわけではない。西鶴はその頃は矢数俳諧に最も大きな関心を注ぎ、その手法の練磨に熱中していた。「一代男」創作の二年後に例の一昼夜二万三千五百句の速吟を成就した。西鶴にとつては、「二代男」の創作は文字通りかけねなしに俳諧師の余技にすぎなかつたのである。それ故、それがごく気軽に気持ちの中で、それにふさわしい方法で創作されたとしてもそれは当然である。それなればこそ、従前の仮名草子の伝統を破る破格の作品が生まれ、それによって浮世草子という新しいジャンルを生むことができたのである。私のこのよう

な発言は決して「一代男」の文学的功績を冒瀆するものではないはずである。

閑話休題、既述のように、「二代男」を世之介中心の作品と解釈せずに庶民の女性を対象とする作品と解釈しなおすことにすると、西鶴の作品の統一的把握の上で多くの利点がある。まず、西鶴の初期の散文作品中の好色物は、——質疑本を除き、伝西鶴本を含めれば——統一的に、それらが女性を対象とした作品群であると理解できる。おそらく深く愛した妻を失ったのち、西鶴が家業も放棄し、半俗半僧の如き生活を送っていたことは伊藤梅宇の「見聞談叢」に記す如くであろうし、その追憶を、臨終の描写に始まる「独吟一日千句」に述べている。以後、西鶴が亡妻の人柄を基点として、それとの比較で種々の女性を冷静に観察したその集積が、西鶴の散文作家としての出発点としての好色物である。谷崎が女性を対象とした作家であつたように、好色物時代の西鶴はもっぱら女性を対象として創作した。その出発点が「好色一代男」であり、その終点が「好色一代女」である。そのように解釈すれば、西鶴の好色物は統一的に把握できることになる。

第二に、西鶴の町人物は町人にとつて重要な金銭をテーマにした作品群であると統一的に把握できるし、同様に武家物もそ

れなりに統一的に把握できるように、好色物も庶民の女性を対象にするということのほかに、その女性たちをその性生活を契機にしてその実態を把握しようとした作品群であると統一的に理解することができる。人間にとつて最も根源的と言うべき性に対して各種の女性がどう対応するか、ということから各種の女性を探索しようというのが、「一代男」はいうまでもなく、その好色物全般の共通テーマであつたと考えられる。そのような統一的把握法に比すれば、世之介主人公論などは全くピンボケ的解釈法と言うべきであると、今の私は考えているのである。

第三に、私の一代男型文章の論からすれば、「一代男」と「諸艶大鑑(二代男)」との関係がよりよく説明できる。私は一代男型文章に関する論致で、各章の本文前部と本文後部とはそれぞれ別種の職能を持ち、もと別種の転合書の一部分であつたが、それらを切り取つて一章に編集したのであらうと述べた。そのために、両者の間に季節の矛盾などが見られるのであらうとした。そのような編集に先だつて、本文後部に充當する部分が多く集められてあり、その中には同種のテーマのものも自然複数成立してあつたと考えられる。それらから取捨選択して、すぐれたものを「一代男」に採用し、残つたものを三編ずつ集め、それを「諸艶大鑑」の一章としたと私は考える。多くの西鶴学

者は、「諸艶大鑑」の首巻にまどわされて、「諸艶大鑑」は三部の遊女について書いた作品と考え違いをしている。ところが、これには地方遊里の遊女はもちろん私娼から地女の記事まである。多くの人はこの作品の細部的実態的分析を怠つて首巻から独断的解釈をしている。これらの文が「一代男」の使い残りであると考えれば、各種の素材の存在理由が最も都合よく説明できるはずである。論者によつては、遊里描写の相違点を理由に両作品の創作時期の差違を論ずることもあるが、それは論拠とするには足りない。むしろ両作品における遊女観の合致などを考えれば、両作品が本来同一時期の作であると考え方がより合理的であると考えられる。かつて野間光辰氏は、「一代男」の成功によつて、西鶴は作者としての自覚を持ち、読者への奉仕を意識し、その結果「諸艶大鑑」の文章は「一代男」より平易になつたと論じられたことがある。^(注10)「諸艶大鑑」の上梓は貞享元年の四月であり、その年の六月五日に一日一夜二万三千五百句速吟という念願を西鶴は果した。それをもつてしても、「諸艶大鑑」の上梓の頃に西鶴が散文作家としての自覚を持つに至るなどあり得ぬことである。「諸艶大鑑」の文章が「一代男」のそれより劣っているのは、もともと「諸艶大鑑」の各章が「一代男」の使い残りの寄せ集めであるためであり、

それなればこそ各種の職種的女性ばかりか地女の記事までも「一代男」同様に含めることになつたとする方がより合理的な解釈であると考ええる。「諸艶大鑑」の大部分と「一代男」の後半部とが、「一代男」の成立以前の旧稿に基づくとの論は早く堤精二などにもあるが、私のように解釈すれば、文章構造からもそのことがより合理的に解釈できるはずである。

第四に、「一代男」と「一代女」との相互関係がより適切に説明できる。この両作品の関係については長谷川強氏は次のように述べておられる。^(注11)

「一代男」が一代記の体をとりながら、現実には各地売色風俗と高名なくるわの名妓紹介であつたのと同じように、「一代女」も一代女の告白の体をとりながら、女性の好色風俗の紹介をしようとしたのである。

私も長谷川氏とほとんど同説である。世之介も一代女も通説に反してこれらの作品を長編化するための方便にすぎないと考える。方便上の人物なればこそ、世之介には人物設定に多くの矛盾があるし、同様に一代女には時間的に不可能なほど多くの職種を体験したことにかけている。私と長谷川氏との間の小差は、長谷川氏が「女性の好色風俗の諸相を紹介しようとした」とされるのに対し、私が庶民の各種の女性を対照にその性的生

活を契機にしてその実態を探究しようとしたとする点にある。

「一代男」にも「一代女」にも、たしかに風俗小説的側面の強いことはよく言われることであるが、西鶴が多くの好色物を通じて求め続けたものはそのような風俗小説的側面だけではないと考える。

以上の四点のほかにも考えられる事柄はなおあるが、それらについては次項以降において、当面の問題事項と関連させながら具体的に述べてみようと思うのである。

(三) 「一代男」と「一代女」とにおける

素材の共通な章

「一代女」がどのような作品と考えられているかをまず見ておきたい。「一代女」はその発端に老女の懺悔話という形式を持つていることから、仮名草子の懺悔物の系列を引く作品と解釈される傾向が強い。その懺悔物としての作品解釈にも諸説があるが、中でも岸得蔵氏の所論が高く評価されている。^(注12)岸氏は「一代女」の懺悔の質が中世的懺悔と異なる所以を説明して、一人称で叙述を進めるすぐれた方法によって、風俗小説的側面と一代記的側面とが巧みに融合されていることを述べられたが、それはこの作品の懺悔物的解釈に立つ所論としては出色の論と

評価されている。

しかし懺悔咄というのは趣向にすぎないし、それに拘ることはむしろ的はずれであるときえ私は考えるが、同じような観点から「二代女」の文学性を論じたものとしては谷脇理史氏の「好色一代女」論序説（『近世文学論集』所収）が高く評価されている。それについては藤江峰夫氏が次のようにまとめておられる。

「二代女」首章の「身のうへの昔を時勢に語り給へ」という設定が、時間の流れを基調とする長編の構想を形骸化すると指摘して、虚偽の体験告白という前提の上にたつ咄の面白さ、風俗描写、風俗時評を評価すべきであると主張し、「二代女」の風俗小説的側面に高い評価を下した。従来「一代女」の評価が、多くその長編性にむけられていたことを考えると、画期的な論であったとすることができよう。

ある意味では私も同感である。しかし、私は「二代女」の本質的性格についての解釈としては、前述の長谷川強氏の論こそ全く画期的な論と考えるが、戦後の「二代女」に関する諸業績を総括された藤江氏は、その前年に発表された長谷川氏の論を全く無視された。学界の潮流を超越した所論がそのようなあしらいを受けることは古来の慣例で、おそらく今後数年はその論は学界人の口の端にものぼらぬことであろう。長谷川氏や私などは当

分の間、学界の異端者扱いを受けねばならぬわけである。

ふたたび閑話休題、「二代男」と「一代女」との間に共通な素材を持つ章が若干あるということについてである。本来両作品にはその可能性を含む章数はさほど多くない。というのは「一代男」では巻五以後は遊女のみを対象とするし、巻四までの二八章中にも地方遊里物が五または六章、男色が三章、地女物が一一または一二章あつて、残る九または二章に相当するものが「二代女」の大部分の章の素材範囲に対応するにすぎないからである。即ち、「二代男」では遊女・地女・男娼に多くの章をさいており、その時点での西鶴の関心のありかを知ることができるし、それに対し「一代女」では各種の職種的女性をできるだけ多く提示することに関心が注がれていたことを知ることができるといふわけである。そのように少数の可能章しかない割には両作品の間に共通の素材を持つ章が多い。しかも、それらの章では、素材が共通であるばかりでなく、その素材とされた職種的女性についての女性観ももちろん同様であるし、時には「一代男」においてはその女性の行動様式などについての描写が不十分であったのを、「一代女」において補足的な説明を加えることによつてその解説が補完されるということもある。もつて、両作品の密着度を考えることのできるということがある。

両作品の間における密着度の強い章としては少なくとも次の章が考えられる。(上が「二代男」、下が「二代女」)。

一ノ六・「ぼんのうの垢かき」——五ノ二・「小哥伝授女」

三ノ三・「是非もらひ眷物」——五ノ四・「瀧間屋祝」

三ノ一・「恋のすてがね」——一ノ三・「国主艶妾」

そのほか、部分的類似・素材的類似があるという点では、次の章もそれに準じさせることができるであろう。

一ノ七・「わかれは当座はらひ」——五ノ一・「石垣恋崩」

三ノ六・「木綿布子もかりの世」——六ノ三・「夜筈附声」

四ノ四・「替った物は男傾城」——四ノ三・「屋敷琢洪皮」

そのほか、二ノ五「旅のできこ、ろ」と六ノ二「旅泊人詐」の章で、類似の素材を趣向のひとつひねりて変化させたものと考えれば、共通点を見ることができよう。趣向をひねって別種の作品に仕立てるという方法は、矢数俳諧以来の西鶴の重要な創作技法と考えられるのである。以上の諸章の素材を「二代男」を中心に述べれば、一ノ六は湯女、三ノ三(三ノ六も)ははずは女、三ノ一は妾女、一ノ七は茶屋女、三ノ六は惣嫁、四ノ四は御殿女中、二ノ五は道中女をそれぞれ素材としたものである。

一ノ六の湯女の章を例にとって述べよう。一代男型の文章で

は、その素材について述べるのは、私の用語で言えば、典型的には本文後部であり、一代女型文章では逆に本文前部であるが、「二代女」では後の巻になるに従って例外的現象が多くなつてき、この章も典型的構成を離れる。それはともかくとして、両作品における対応部分を挙げてみよう。(1)〜(4)は「二代男」、(1)′(4)′は「二代女」。

(1)又の日は。兵庫迄来て。(略)

(2)何とやら総々しく。是によこる、もと。すぐに風呂に入て。名のと、ば。水さしますなど。口びるそつて中高なる兒にて。秀句よくいへる女あり。とらえて。御名ゆかしきと問へば。忠度と申。いか様是を。只是置れじと。うす約束するよりはや。あがり湯の。くれやう。ちらしをのませ。浴衣の取さばき。火入に気をつけ。髪水を運び。鏡かすやら。其もてなし。何国も替る事なし。

(3)風義は。ひとつきる物。つまたかに。白帯こ、ろま、に引しめ。やれたら親方のそん。久三。挑灯ともしやと。いふかた手に。草履取出しく、り戸出るより。調子高に。はうばいを誘り。朝夕の。汁がうすひの。はさみを。くれる筈じゃが。たる、か。しらぬと。ひとつとして。叩べき事に。もあらず座敷に入さまに。置わたを壁につけ。立ながらあ

んどんまはして。すこし小開き。中程にざして。雁首。火になる程はなさず。おり／＼あくびして。用捨もなく。小便に立。障子引たつるさまも。物あらく。からだを横に置ながら。屏風へだてたるかたへ。咄しを仕懸。身もだへして。蚤をさがし夜半。八つの。鐘のせんさく。我がこゝろにそまぬ事は。返事もせず。そこ／＼にあしらひ。其後舩のみ。どこやらひえたるすねを。人にもたせ。たくよ。くむよと。寝言まじりに。いかに事欠なればとて。いつの程より。かく物毎をさもしくなしぬ。

(4) 抑丹前風と申は。(略)

これに対応する「一代女」は次の如くである。

(7) 身持は手のものにて日毎に洗ひ。押下て大島田幅疊の髻を委むすびにして其はしをきり／＼と曲て五分櫛の真那板程なるをさし。暮方より人に被ける白なればとて。白粉にくぼたまりを埋み口紅用捨なくぬりくり。おのづから薄肌となりし加賀絹の下紐を。こどりまはしに裾みじかく。柳に鞠五所しほりあるひは袖石畳。思ひ／＼の明衣随うつてゆきみしかに。竜門の二つ割を後にむすび。番手に板の間を勤めける。(略)。

(4) あがれば眞若盆片手にちらしを汲てひとしほ水ぎはを立も

てなす風情。似せ幽禅絵の扇にして涼風をまねき。後にまはりて灸の蓋を仕替蟹のそ、けをなでつけ。当座入の人は鼻であしらふなどかりなる事ながら是を羨敷。

(7) 恋の中宿を求て此君逢をよぶに。仕舞風呂に入て身をあらため色つくるまに茶漬食をこしらへ著したに置く。借着物始末にかまはず引しめ。久六灯挑ともせば揚口よりばたばた歩み宵は縮帽子更ては地髪夜ありき足音かるく其宿に入て。恥ず座敷になをりゆるさんせ着物三つが過たと肌着は残してぬき掛して。是こなたきれいにして水をひとつ飲さしやれ。今宵程氣のつまる事はない。屋ねに煙出しのない所はわるいと。用捨なく物好して身を自由にくつろぎしはさりとはそれと思ひながらあまりなり。されとも菓子には手をかけす盃をあさう持ならひ。肴も生貝焼玉子がありながら。にしめ大豆山椒の皮などはさむは。色町を見たやうにおもはれてしほらしければ。盃のくるたび／＼にちと押へましょ。是非さはりますとお仕置の通り。百座の参会にもすこしも色の替りたる事なし。ことかけなればこそ堪忍すれ。是を思ふに難波に住なれて。前の鯛を喰なれし人の熊野にて。盆のさし鯖を九月の比も珍敷心に成こどく。傾城見たる目を爰にはわすれ給へばんなふの垢をか、せて水

の流るゝに同じ遊興なり。(略)其跡は床入女三人に島のふとんひとつ布子式つ。木枕さへたらぬ貧家の寝道具。恋は外に川堀の咄し身のうへ親里。跡はいつとても芝居の役者。肌には添ばおもひなしか手足ひえあがりて舩はなはだしく我身は人にうちまかせ。男女の淫楽は互に臭骸を懐といへるも。かゝる乱姿の風情なるべし。我も亦其身になりて心の水を洩しぬ。

「二代男」の一ノ六の本文前部は原転合書の中国筋物の一部分に若干の改稿を施したものであると私は考えている。^(注14)その残りは三ノ二「袖の海の香壳」の本文前部に使用されたように思われる。本文後部のうち、(1)は兵庫の遊里の件、(2)は風呂屋の件、(3)は湯女の件、(4)は江戸の丹前の風呂屋の湯女勝山の件である。それぞれが別個の転合書から摘出されて、十分に配慮もなく接合されたと思われるほどに文脈の不備な章である。私はこんな経験を持つてゐる。かつて神戸大学での演習で、この章を担当した学生が、この章のテーマは湯女の中にもすぐれた女性のいることを述べたものであり、それで勝山のことを章末に配し、それとの対照のためにその直前にふしだらな湯女のことを精細に述べたのである、と分析した。西鶴学者が一般に考えることは全く正反対の解釈であり、勝山の項が谷脇理史氏の言われる

ように余白を埋めるための附加的な事項であることを納得させるのに苦労した。たしかにすなおに読めば学生のような解釈を当然とするような構成の作品であり、その意味では一ノ六は失敗作であると言うべきなのであろう。

一ノ六は全体的に断片的な転合書片の寄せ集めで出来ており、それらの間には統一がない。(2)の湯女は秀句をよく言う明朗な女性であるが、(3)の湯女はたしなみのないげすな女性であり、(4)の湯女は評判の才女である。またそれらの転合書片をつなぎ合わせる説明辞の足りないものがある。つまり、(3)では湯女がなんのために外出するのか明らかでない。私は無智なため、湯女はその風呂屋内で売春行為をするものであり、この部分は遊女などの描写の文を転用したものかなど考えたこともあったほどで、お恥かしいかぎりである。とにかく、一ノ六は内容的にも地理的にも不十分な点の目立つ章である。

かつて六ノ四「寢覚の菜好」が六・七個の転合書片の接合から出来ているという拙論に対し、谷脇理史氏が僅か千二百字ほどの文章にそんな厄介な事をせずとも書き下せばすむことではないかと言われた。まさにその通りである。にもかかわらず、小転合書片の接合と見られる章があることは、「二代男」の編集がすべて西鶴一人の手になつたのではないことを示唆する可能

性があるということ述べたが、この一ノ六もそのような章の
一つと言えるかも知れない。そう思つてみれば、この章の最後
に「ためしなき女の侍り」と「侍り」が終形止めになってい
るのも異様である。西鶴の文体では、「けり」と「侍り」とは連
体形止めにするのが慣例だからである。

「一代男」における湯女の描写を、簡略不統一と評すること
が許されるとするならば、「二代女」の湯女の描写は超精細・描
写過剰と言つてよいかも知れない。「一代男」では内容量不
十分のため勝山の項を補充せざるを得なかつたが、「二代女」で
は全く逆の結果になつている。というのは、典型的な一代女型
文章では、本文前部で一代女が本文後部で体験することになる
職種について解説し、本文後部で一代女が「我」「みずから」
などの自称代名詞でその体験譚を行なう形式になるのであるが、
五ノ二では、湯女の一般論的な解説が長ながとされるため、一
代女の体験譚を行なう余地がなくなつてしまい、章末で僅かに
「我も亦其身になりて心の水を濁しぬ」と破格の記述に終るこ
とになるからである。

「一代女」の描写が「一代男」のそれと密接な関係を持つと
思われる箇所は多い。(3)で湯女の外出の理由を述べなかつたの
に対し、(7)では「恋の中宿を求て此君遠をよぶに」として(3)の

説明不足を補充している。ただ「君遠」と複数にする理由
に不備を感じはするが。その他「一代男」の辞句と「二代女」
のそれとの間に共通もしくは類似のものが多し。たとえば、(上
が「一代男」、下が「二代女」)。

(1) ぼんのうの垢かき——ぼんなふの垢をか、せて水の流る、
に同じ遊興なり。

(2) うす約束するよりはや。あがり湯の。くれやう。ちらしを
のませ。浴衣の取さばき。火水に気をつけ。蟹水を選び。

——あがれば苳蓉盆片手にちらしを汲てひとしほ水ぎはを
立もてなす風情。(略)蟹のそ、けをなでつけ。

(3) やれたら親かたのそん。久三。挑灯ともしやと。——久六
挑灯ともせば。

(4) からだを横に置ながら。屏風へだてたるかたへ。咄しを仕
懸。——恋は外に川堀の咄し身のうへ親里。跡はいつとて
も芝居の役者噂。

(5) 夜半。八つの鐘のせんきく。——夜半の鐘に気をつけ皆寝
さんせぬか。こちらは毎夜のはたらき身はかねてした物で
もなし。夜食も望みなしとはいへども。

(6) 鼻紙も人のつかひ。其後軒のみ。どこやらひえたるすねを。
人にもたせ。——肌上添ばおもひなしか手足ひえあがりて

鮮はなはだしく我身を人にうちまかせ。

(7)いかに事欠なればとて。いつの程より。かく物事をさましくなしぬ。——ことかけなればこそ堪忍すれ。

右では、描写の共通辞句こそ短かいかも知れないが、その描写の情況は全く同種のものと言える。そしてそのようなことをも含めて言えば、関連する事項はこれらより遙かに多い。そのことからすれば、「二代女」の五ノ二は「一代男」の一ノ六を明らかに踏まえたとする作と考えざるを得ない。同様のことは「一代男」の三ノ一・三ノ三についても言える。その他の関連する章として挙げたものについても類似のことが言える。そして、そのような現象は西鶴の創作法の一つを示唆するもののように思われる。「一代男」の三ノ五―四ノ一から「諸国咄」の「蚤の籠ぬけ」が創作されたのであろうと述べたことがあるが、同様に二ノ三「女はおもはくの外」の趣向をひねって四ノ二「忍び扇の長歌」が、四ノ三「夢の太刀風」の趣向をひねって三ノ四「紫女」が創作されたと考えられることもできる。同時に、三ノ五―四ノ二の諸章で、地理的变化に焦点を置いた点も「諸国咄」と関連があるろう。西鶴の創作法の一種として、中国物の翻案などがよく言われるが、このように既出の作品の趣向の転換によって生じた作品も多いのではないかと、私は考えてみるのである。

(四) 一代男型文章と一代女型文章

西鶴の作品には、その作品における主題の展開法についての配慮に対応して種々の文章構成法が工夫されている。それらのうち、「一代男」において成就されたものをかりに一代男型文章と名付け、「二代女」に多く見られるものを一代女型文章と名付けることにした。「一代男」の全作品はことごとく一代男型文章で構成されているという意味でもないし、一代男型文章と言われるものはことごとく典型的構成法を完備していると考えているわけでもない。「一代男」の中にも一代女型文章があるし、万文古型文章もあるし、諸国咄型文章もある。また、一代男型文章の中に入れておくものにも、その典型的構成法を備えていると言つてもよさそうなものはあるが、それに到達する前段階の不十分な構成法の文章が多い。ただ、「一代男」の諸章がどんな順序で成立したのか、については、私なりに考えがあるが、一代男型文章の順序もほぼその順序に應じるように思われるし、同時に比較的遅く成立したと思われる部分に一代女型文章が現われる。即ち、「一代男」の編者はその作業の進行の中で、まず一代男型文章を確立し、ついで一代女型文章を着想したのであるうし、一代女型文章がすでに成立していたことは「一代女」の

展開を容易にすることになったものと思われる。一代男型文章についても一代女型文章についてもそれぞれすでに公にしているが、「二代男」と「二代女」との相關関係を主題にしているのは、改めてこのことを略述しておきたい。

一代男型文章については二ノ一「はにふの寝道具」を例文としてその文章構造を次のように分析してみた。

章首——導入・承接

本文前部——前提的設定部

(7)世之介が旅に出ること

(4)その結果世之介が後ジテに出会うこと

本文後部——主題部

(7)後ジテ中心の叙事・解説

章末——終結・連接

章首の導入とは、本文後部でも必要な要件となる主題・素材等について予告的記述を行なうもの、同じく承接とは当該章を前章に接続させ、ひいてはそれを全体構造の一部とする職能を持つもの、二ノ一―二ノ三、三ノ五―四ノ二の章群はこの点に特に配慮されているが、多くの章の場合その点にまでは行き届いていない。本文前部を前提的設定部と名付けたのはこういうわけである。本文後部の主題部において、後ジテ中心に叙事なり

解説なりが展開するにあたって、突然そのようなことになつたなら不自然であるので、その前に世之介がその人物なりその場面なりに遭遇しておいて、その叙事なり解説なりを引き出しやすい情勢にしておくことが最も好ましく、作品の展開を自然にするわけである。世之介という人物は、情況設定部の中でだけ、中心的に行動するが、もともと主題部導入のための人物なので、その人物形象には統一性がなく、常に主題部本位に形象される。それで、複合的人物であるとか、五四人の別人物の統一的固有名詞であるとかと早くから言われながら、しかもすべての西鶴学者は主人公ではないと言いきれないできたのである。今後もしばらくはそういう情勢が継続することであろう。もっとも、長く客観的分析を持統してこられた老学徒には同感される方がおられるが、主観的分析を中心に世之介論の新奇さにくきみややつされるといった新進・中堅学徒は当分の間は納得されないことであろう。

またまた閑話休題、世之介は本文後部で後ジテを合理的に登場させるための人物にすぎず、夢幻能物における「諸国一見の僧」に相当する人物であると私は考えるが、それでは「一代男」の眞の主人公は何者かと言うに、それは各章の本文後部、即ち主題部の中心になるものであり、それらは、(7)三部遊里の遊女、

(イ)地方遊里、(ウ)私娼または半^{くま}玄人女、(ニ)地女、(ト)男娼などの庶民層の女性を中心とする者である。「一代男」の主人公をそのように考え、「一代女」もそれに準じて考えるなら、西鶴の好色物は庶民の女性を対象とし、それらの女性を性的生活を契機にして、その実態を探究することを意図した作品群であると統一的に把握することができるわけである。「一代男」には若干の男色物がある。それらの男色物を選択するためには、女性物の場合と同様に、多くの類似の作品が用意されてあつたことと思われる。それらの使い残りの作品や新たに用意された作品を中心に、「一代女」で好色物を成就したあと、西鶴は男色物(武家物)に転換することになると私は考えている。そういうふうには男色物などと素材の転換する根底にあるものがよりよく納得できるように思われるのである。

ついでに言えば、私が世之介を「一代男」の主人公でないであろうと考えるようになったのは数年以前からのことで、四ノ五(昼のつり狐)を初め六ノ七・七ノ二・八ノ一・八ノ三等等と世之介を借り物扱いにする章の多いことに気付いてからであるが、同じく数年前に一代男型文章という構造に気付いて一層その確信を強め、更に最近別の角度から各章の完成度如何を考えるよう

になって、層一層確信を持つに至つたわけである。というのは、「一代男」の各章は叙事文を中心にしてゐる。その叙事文の三要件として、時称・所称・人称の三者を考えること、つまり叙事の行なわれる時間、叙事の行なわれる場所、叙事の中心人物となる者の三者である。そういう観点から「一代男」を分析してみると、所称は全章に共通に現われるが、他の二要件には、その完備するもの、時称の欠落する章、人称(世之介)はあつても造形的統一の考慮されてない章、時称・人称ともに欠落する章などの各種のあること、それらが多くの場合章群を構成していることを発見した。そのことを系統づけると、未完成作品群から完成作品群へと転換していったあとが分かるし、同時に「一代男」がどんな経緯で編集されたかが明瞭に把握できるのである。ところが、「一代男」の首巻に完成度の強い作品があるため、多くの研究者はそれに迷わされてしまい、更にはこの作品を世之介を主人公とする作品と思ひこんでしまうことになつたわけである。それらの経緯はいずれ機会を得て報告したいと考えている。

西鶴の作品は好色物の「一代男」「五人女」「一代女」を除けば、いずれも短編集である。そのように、西鶴は本質的に短編作家なのである。「一代男」も最初は短編集として編集された

のであろうが、その編集過程で、種々の方法が模索された。その一つとして、地方遊里物に多い、友人などの同行者と地方遊里を回避する趣向などが考えられる。そのようなもの一つとしてある時期に統一的人物の設定を考え、遂次その人物造形を細密化することの中で、最終的に世之介の年齢的成長を根幹とする趣向が成立したものの如くである。そのように、世之介という人物は、「二代男」の編集過程で、種々の模索の結果案出された人物なのである。そのことは「二代男」全巻を巻まきの順序などということに拘わらずに、巻まきの完成度如何ということを中心にして、大局的に分析すれば、容易に判明するはずである。

ところが、全ての西鶴学徒は、「二代男」は長編小説であり、長編小説には主人公があるはずであり、その主人公は毎章に登場する世之介に相違ないとの先入観を持ち、しかも巧妙に配置された、作品としての完成度の高い首章から分析を始め、早くもその欠陥を暴露している一ノ五・一ノ六などでは、世之介の名も年齢もないという編集初期形態を露呈しているにもかかわらず、中には世之介についてタテマエとしての年齢とホンネとしての年齢に著しい齟齬を生じているような現象を一切見のがし、御親切にも不備な点を補足し、かばいにかばっていくという態度を持すものだから、この作品の本質を見のがしてしまうので

あろう。

「好色一代女」の文章構造については、すでに一文をものし^(注16)てある。ただ、それは特殊な同人誌的な機関誌で、人目にふれる可能性も少ないもので、改めて簡略に述べておきたい。その文章構造は一代男型文章の文章構造に類してい、ただ若干の部位の職能を異にする。つまり、一代男型文章では本文前部は前提の設定部であったし、一代女型文章でも同様に本文後部のための情況設定を行なうものである点と同様であるが、その具体的方法が相違する。つまり、一代男型文章では、(1)世之介が旅に出ること、(2)その結果世之介が後ジテに出会うこと、という二種の職能を持つてい、それによつて本文後部でなされる後ジテについての叙事・解説を合理化する。ところが、一代女型文章では、本文前部においては、一代女が本文後部で体験することになる職種についての一般的な解説を実施する。典型的にはそれは説明文である。それに対し、本文後部では一代女がその職種に就いた時の体験譚となる。「我」「みずから」などの自称代名詞で体験を語り(まれに他称代名詞で表わされることがある)、多くは自己の性欲過剰のために失敗して転職せざるを得なくなるという結末になるが、時には逆に一代女が逃出することもあり、また湯女の場合などのようにそのような結果を伴わぬ

こともある。要するに、それは転職の口実に過ぎないのであつて、そのことを重視してはならない。

対照的な章に「一代男」の三ノ一「恋のすて銀」と「一代女」の一ノ三「国主艶妾」とがある。前者が一代男型文章であるのに対し、後者は一代女型文章である。一ノ三では、まず章首で、奥方の死去の後、世継ぎのないことを家中の者が悲しみ筋目正しき家柄の美女四十余人を選んだが、誰一人殿の思召しにかなう者がなかった、として本文部の導入とする。本文前部では、東国の女性たちは色道の慰みにはなりがたい、女は京女に限ると京で側室探しをすることにし、殿のお好みに任せて人置きを通じて女性を集めさせた、と述べる。その際、東国の女性論、当時好みの女性論、奉公人の周施人論などを長ながと展開する。本文後部では、人置きの見立てた百七十余人はいずれも不合格。そこへ、一代女の容色の程を伝え聞いて宇治から迎えとり、一代女は殿のお情けを浅からず繋る身となつたが、まもなく殿は若くして地黄丸の御厄介になる身となられ、瘦せ衰えられた。章末では、これは都女の色好み故と家中の者たちに疑われて俄にお暇を出されてしまった、と述べる。

一代女型文章は「一代女」の初めの方の章に典型的なものが多く、その終りの方、ことに作者の手なれた素材ほど描写が精

しくなつて、破格的文章構造を取るものが多い。そのことよりも、その一代女型文章が「二代男」の中にも若干早くも現われているというの方が、「一代女」と「二代男」との相関関係を論じるのに重要であろう。

「一代男」において一代女型文章式の文章構造を持つ章としては、二ノ二「髪きりても捨られぬ世」、四ノ四「替つた物は男傾城」などが挙げられよう。二ノ三「女はおもはくの外」などもその類に加えることができよう。二ノ二では、本文前部で長ながと未亡人論を述べ、本文後部で未亡人と世之介との出合いや捨子の件に及ぶ。四ノ四では、本文前部で御殿女中の性生活論を述べ、本文後部で御殿女中と世之介との出合いの件に及ぶ。これらは「一代女」に多い一代女型文章であると解釈するのが自然であると考えられる。ところが、かつて野間光辰氏は「西鶴五つの方法」で、二ノ二の前半を「長枕」(枕)の一種で、特に長いもの」と解説された。^(注17)「一代女」の諸章との相互関係を考慮すると、これらは一代女型文章の本文前部と考へておく方が好都合であると考えられるのである。

注(1) 森修氏・「西鶴の問題」(「解釈と鑑賞」昭和三年八月号)。

(2) 「古事記・日本書紀」(上田正昭氏ら、「日本古代史」、一九八〇年)。

筑摩書房)。

- (3) 野間光辰氏・「近代艶隨書」の考察(「西鶴新政」所収)。
- (4) 島田勇雄・「西鶴本のかなづかい(5)」——「丹波太郎物語」について——(「研究」・四二二号)。
- (5) 島田勇雄・「西鶴本のかなづかい(1)」「(7)」(「研究」・三五―四七)など。
- (6) 森鉄三氏の発想はユニークである。しかしその論証には十分学的であると言いがたい点が多々ある。それが森氏の論に対する賛成者の乏しい理由なのであろう。しかし、国文学徒以外には、学界が一般に森氏の論に賛同しないのは不都合と見えるらしい。たとえば鈴木敏夫氏の「江戸の本屋」(中公新書)にそのような論が見られる。そのような学者批判こそ理由なきものと言わねばならぬ。
- (7) 野口武彦氏・西鶴と小説言語(「国文学」・昭和五四年六月号)。
- (8) 島田勇雄・「好色一代男」の修辞法三題(「甲南国文」・二七号)。
- (9) 島田勇雄・「好色一代男」の俳諧的文章と一代男型文章(「文学」・昭和五五年八月号)。
- (10) (岩波書店、「日本文学史」第十巻)。その他類説が多い。
- (11) 長谷川強氏・「好色一代女」の世界(「西鶴物語」・有斐閣ブックス)。
- (12) 岸得藏氏・「好色一代女」私見(「假名草子と西鶴」所収)。
- (13) 藤江峰夫氏・好色一代女(「国文学」・昭和五四年六月号)。
- (14) 島田勇雄・「一代男」における中国筋物について(「解釈」・昭和四八年一月号)。
- (15) 注9の論攻。「好色一代女」の文章(「水門」十二号)。
- (16) 注15参照。
- (17) 野間光辰氏・西鶴五つの方法(「文学」)。